

木村熊二を偲ぶ

蓮峰忌

小諸義塾の会

令和5年
2月28日

(於) 中棚荘

生誕180年 弘化2年〈1845〉

令和7年《2025》

歿後100年 昭和2年〈1927〉

令和9年《2027》

市立小諸義塾記念館開設30年

令和6年 〈1994～2024〉

小諸の春

作詞 木村熊二

没後50年記念曲

作曲 林 良夫

小諸の春

木村熊二 作詞

一、胸に煙のたへまなき
浅間の山は霞して
裾野は春となりにけり
すみれたんばの床いでて
あがる鶯雀の声々は
青空遠く消えてゆく

二、駒引きかよう人々の
歌う小唄は面白く
昔をしのぶ小踏節
桃と桜は懐古園
梅が香のこる中棚の
道をたどりて戻り橋

小諸の春

木村熊二 作詞
林 良夫 作曲

Moderato

Handwritten musical score for '小諸の春' in 4/4 time, Moderato. The score consists of ten staves of music with Japanese lyrics written below the notes. The lyrics are: 小 諸 の 春 小 諸 の 春 小 諸 の 春 小 諸 の 春 小 諸 の 春 小 諸 の 春 小 諸 の 春 小 諸 の 春 小 諸 の 春 小 諸 の 春. The score ends with a double bar line and the number '2. 小 諸'.

小諸義塾校舎

小山周次画伯のスケッチ画

市町田村病院に移築されていた
2階建て校舎

市立小諸義塾記念館



卒業生の一人小山周次画伯による小諸義塾のスケッチ



二階建ての小諸義塾
その後田村病院がつかっていた

懐古園内三つの 記念碑





明治末期の三ノ門入口

信越線開業直後の小諸駅

鉄道馬車駅として使用されていた本陣

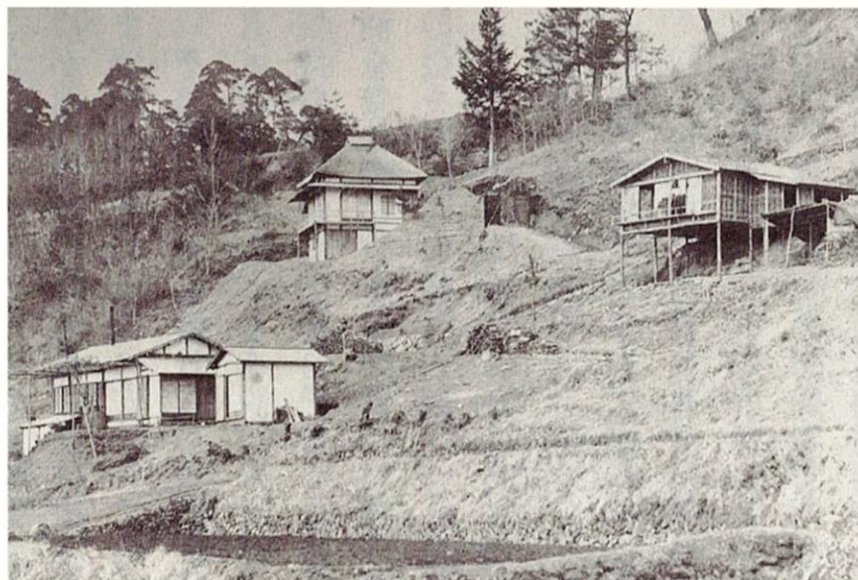


中棚水明楼

熊二が終生利用した別荘

東沢の別荘

熊二や藤村が招待された
掛川利兵衛所有の別荘



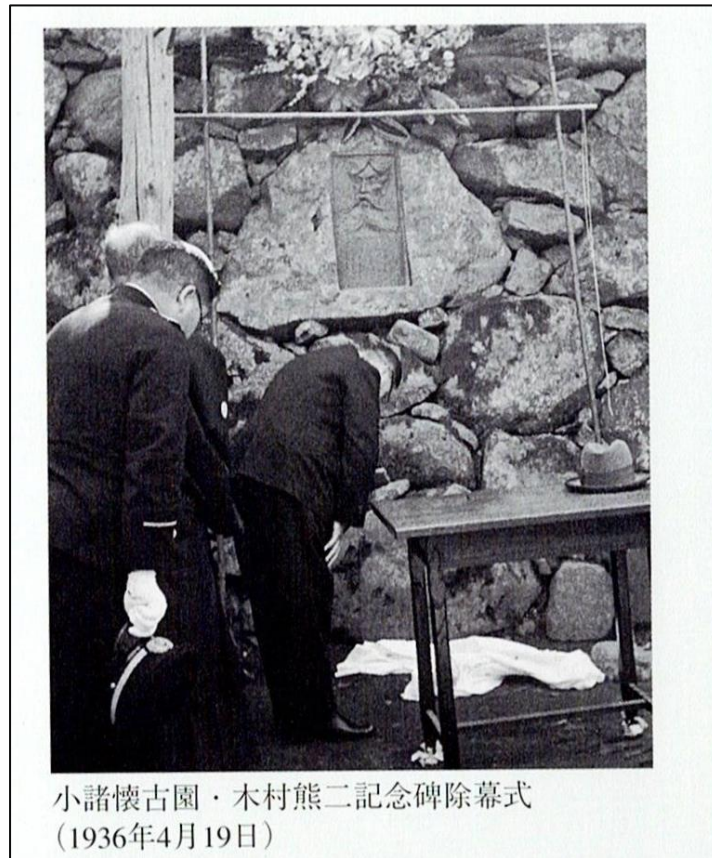
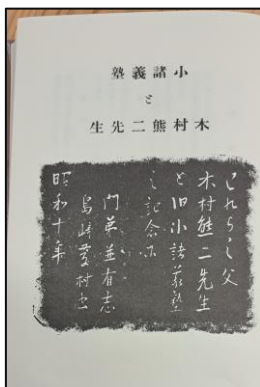
完成間もない水明楼(上)と中棚鉦泉の建物(中棚荘提供)





東京都谷中の木村家墓地
文京区西片町に現存している
田口家玄関と母屋の一部
(熊二の屋敷の敷地内)

(財)八十二文化財団『異色の水彩画家・小山周次展』1995年5月22日～6月13日 図録掲載資料 【小山寛氏提供】



評伝 木村熊二

遠祖は信濃佐久郡
の豪族 桜井氏

仙石秀久佐久郡領有
家臣となる

仙石家但馬出石藩
転封に随伴

祖父・桜井東門
但馬出石藩校弘道館
学頭

父・桜井石門
出石藩勘定方奉行

八歳で出府

湯島聖堂講徒
木村琶山家の養子

昌平黌で学ぶ

幕臣として
明治維新を迎える

小諸義塾創立者 木村熊二の生涯

幕臣から12年にわたる米国留学

宣教師となって帰国

明治16年伝導活動で初めて小諸を訪れる

日本人による女子教育の明治女学校を創立

最愛の妻の死を乗り越え

真の聖教者を目指し

遠祖の地 佐久への移住を決意する



小諸図書館特別企画展示

木村熊二と小諸

【第一回】令和五年三月三日より

明治十六年（百四十年前）

初めて小諸を訪れる



【第二回】未定

小諸義塾創設と

木村熊二

【第三回】未定

聖教者木村熊二と

その時代

協賛・資料提供

小諸義塾の会

東信史学会

小諸図書館友の会



一 お家騒動と桜井氏

二 昌平黌入学

三 幕臣時代

戊辰戦争と静岡移住

四 米国留学と基督教入信

ホーブルカレッジ入学

基督教入信

ニューブランズウィック

神学校入学

五 帰国後宣教師として活動

第三回全国基督教

信徒親睦会

六 初めて小諸を訪れる

木村熊二略年表(1)

弘化二年(一八四五) 但馬出石藩(兵庫県豊岡市)

儒学者桜井石門の次男として

京都で生れる

三歳で初めて出石に戻る

嘉永五年 八歳 叔父三郎を頼り出府

湯島聖堂で学ぶ

安政一年 十歳 漢学者木村琵琶山の養子となる

昌平黌(後の東京大学)入学

安政三年 十二歳 佐藤一斎・河田廸斎から儒学、

中村敬宇から漢学、

田辺蓮舟から蘭学・英語を学ぶ

元治一年 二十歳 幕臣として天狗党の乱で日光へ出陣

幕府総裁・勝海舟の配下となり、

京都・大阪 探索方として活動する

慶応一年 二二歳 田口鏡子、十七歳と結婚

佐藤一斎の曾孫、

(田口卯吉の異父姉)

第二次長征に参戦、歩兵指図役

慶応二年 二三歳 百俵七人扶持、徒士目付となる

下谷徒士屋敷に居住

慶応四年 二四歳 長男祐吉誕生

幕府瓦解後一家は静岡へ移住

明治三年 二六歳 駐米大使森有礼の

一行に加わり渡米

明治四年 二七歳 米国ミシガン州・ハーランド

ホープ・カレッジ入学

明治五年 二八歳 オランダ改革派ホープ教会にて

基督教の洗礼を受ける

明治六年 二九歳 文部省留学生から私費留学となる

明治十二年 三五歳 ホープ・カレッジ卒業

ラトガース大付属

ニューブランズウィック神学校入学

明治十五年 三八歳 神学校卒業、

米国オランダ改革派

派遣宣教師となる

帰国

下谷初音町に家塾を開く

明治十六年三九歳 下谷教会牧師に就任

第三回全国基督教徒大親睦会参加

高碓安中方面から信州への伝道活動

(初めて小諸を訪れる)

明治十七年四〇歳 駒込西方町へ転居、

旧約聖書翻訳事業

YMCAの育成に係わる

明治十八年四一歳 明治女学校開設、

妻鏡子と共に日本人による

女子教育の実践を目指す

明治十九年四二歳 妻鏡子コレラに罹患し急逝

校訂増補 木村熊二日記

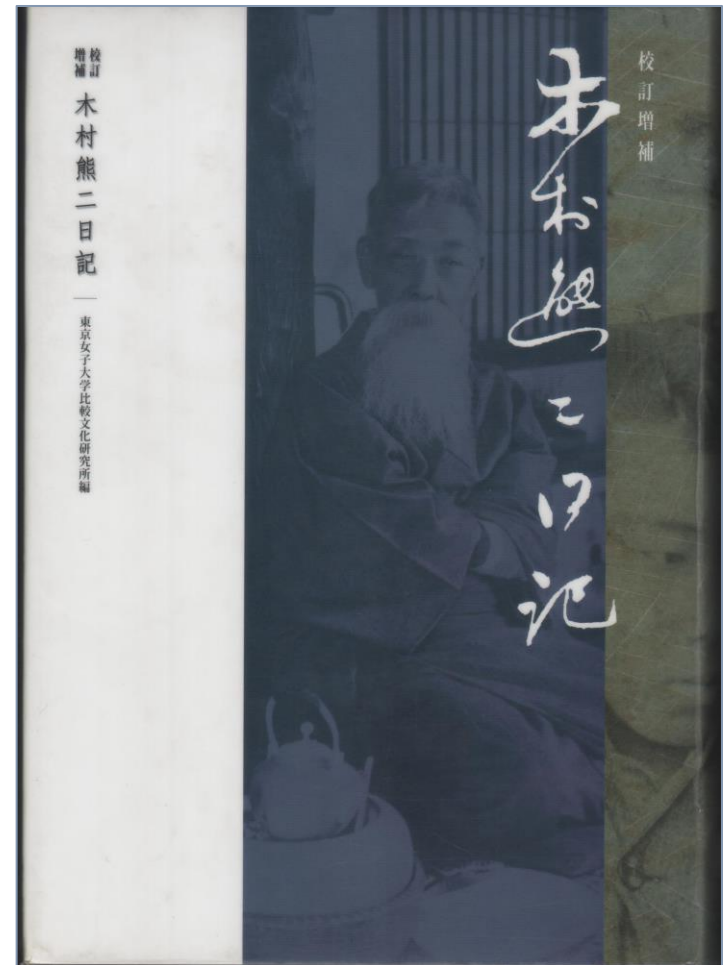
東京女子大学比較文化研究所編
2008年3月31日発行

旧・新版刊行担当者

『木村熊二日記』(1981年3月刊) 監修・名倉英三郎
英文日記校訂・清水護
翻訳・下山嬢子 関雅子 坂田純子 田中貞美
伊藤千恵子 中村(赤木)直子 編集・矢部浩子

『翻刻版 木村熊二英文日記』(1992年1月刊)
監修・寺沢芳雄 翻刻・編集 中村(赤木)直子

『校訂増補 木村熊二日記』(2008年3月刊)
校訂・編集 中村直子



『木村熊二 鏡子往復書簡』

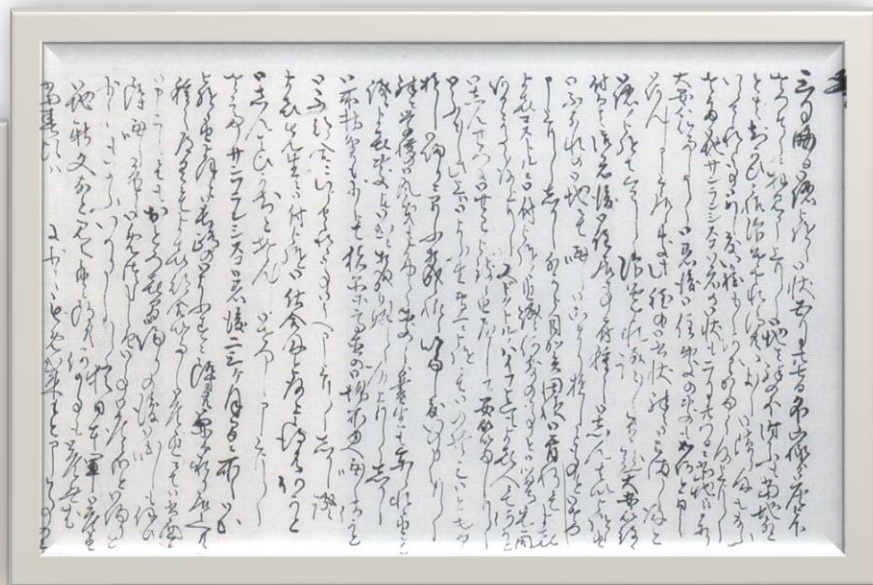
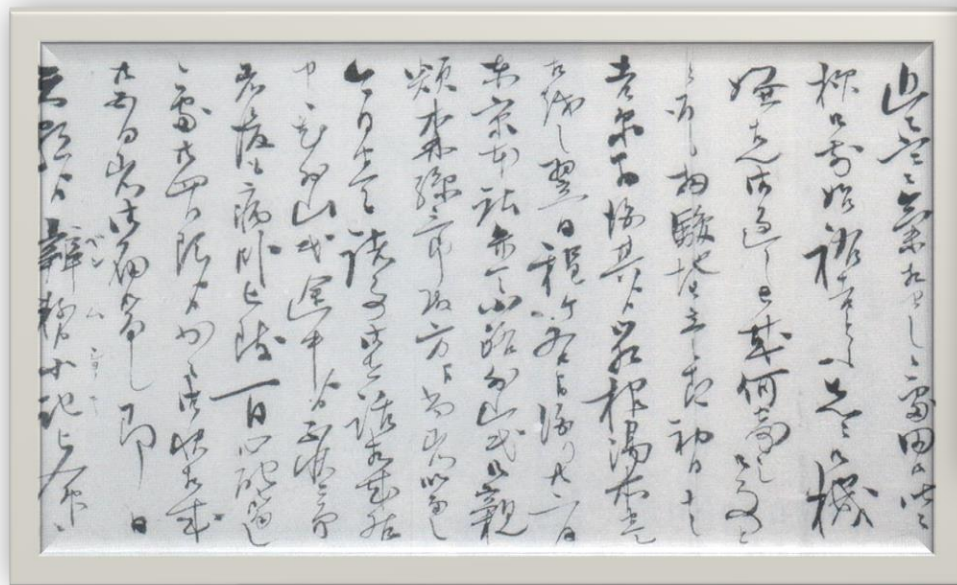
東京文化女子大学比較文化研究刊（解題 永原和子 1993年3月31日発行）

明治3年11月2日鏡子宛墨書

「木村熊二往復書簡 □絵P281」

明治4年6月5日熊二宛

「木村熊二鏡子往復書簡封書墨書 □絵P50」



明治十六年（一八八三）

三七 七月十四日 木村鑑子宛（墨書）

十一日十二字当地着、海野丁上村半兵衛方江旅宿を求め、直ニ当所信者上屋孝吉と中人ニ接し、追々多くの信者とも懇意ニ相成、十二日より毎夜講義を始め、夜十一時頃まで宗教の議論も有之、毎夜〱不信者の舌鋒を打擢かんと狂ハ信者の家々を訪ひ申候。明日は日曜なれハ聖晚餐を守り、夜ハ市中の不信者を一同相集メ演説いたし候心得ニ御坐候。明後月曜ニハ当所出立し長野即ち善光寺の地ニて伝道セんとす。されハいつれ高崎に帰る事ハ十九日か二十日頃ならんと信んし申候。旅中無相替儀体も極て壯健ニて神ニ感謝セリ、当地の暑ハ東京と同様ニて此地ニてハ迎も消夏と申訳ニハいたりかたし。八月迎もとて当地の信者ハ引留候へ共この暑ニハ閉口ゆへ、可相成ハ速ニ上州ニ帰り山の手ニ住居セんとす。最高崎を本營と定め所々へ出張の積リニ御坐候。何れ東京へ帰りハ米月中旬ならんか、一同御機けんよく御過し被成候事と存候。東京ハ定めし暑も強く存居候。当地ハ昨今よう〱かひこを仕舞、此より機ニか、り候様子ニ御坐候。今日二時より懇親会ニて出かけねハならず夫ゆへ一寸前件申進候。乍末皆様江も宜敷。倚子もなく机もなし、困却候。祐吉ハ定めし勉強セる事と存候。帰宅後蒙求を試檢セんとす。能々熟説いたし置候様御通し置可被下候也。

七月十四日

熊二

鏡どの

(封筒表書)

東京谷中初音町貳丁目三番地
木村祐吉殿
要信

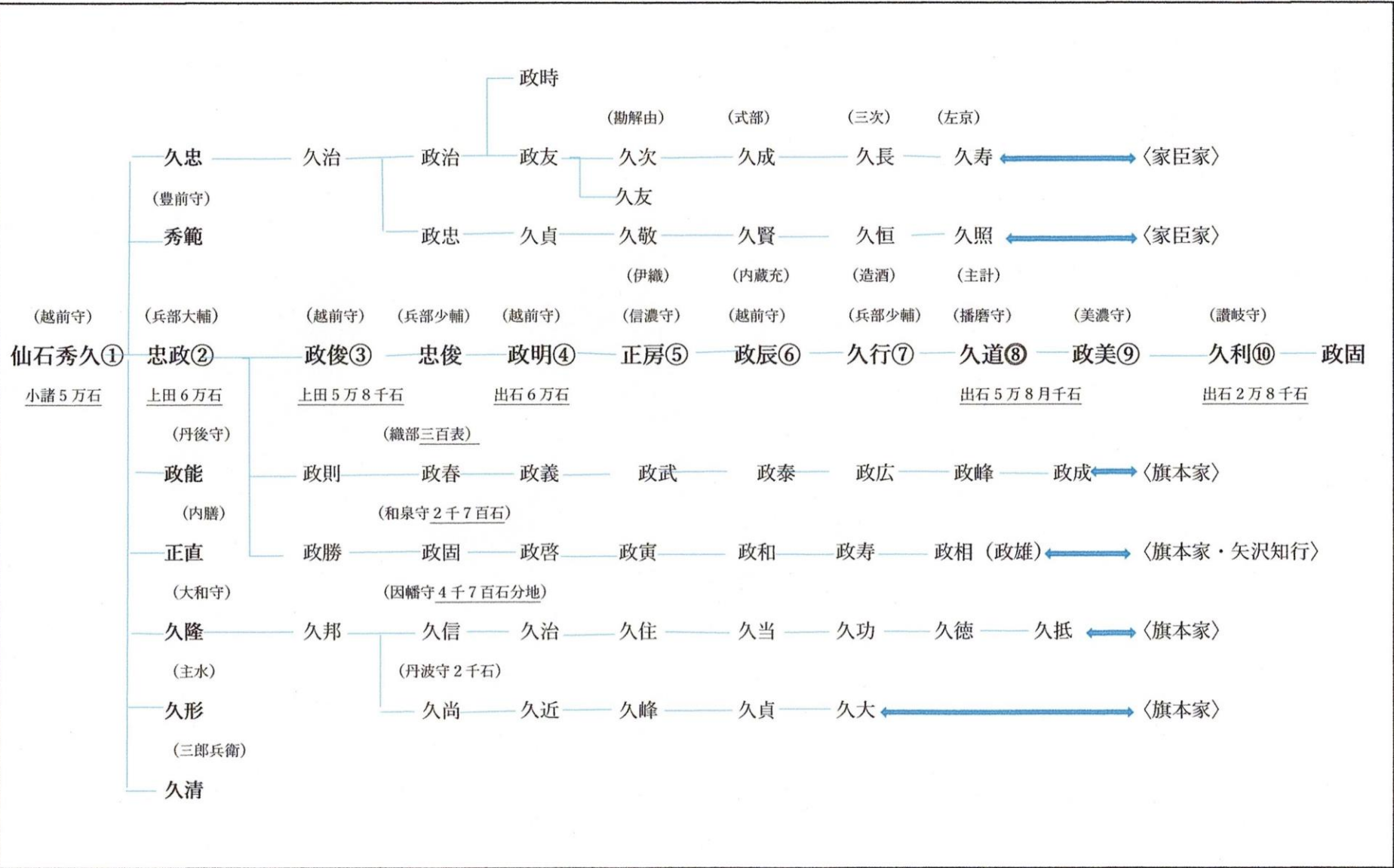
(封筒裏書)

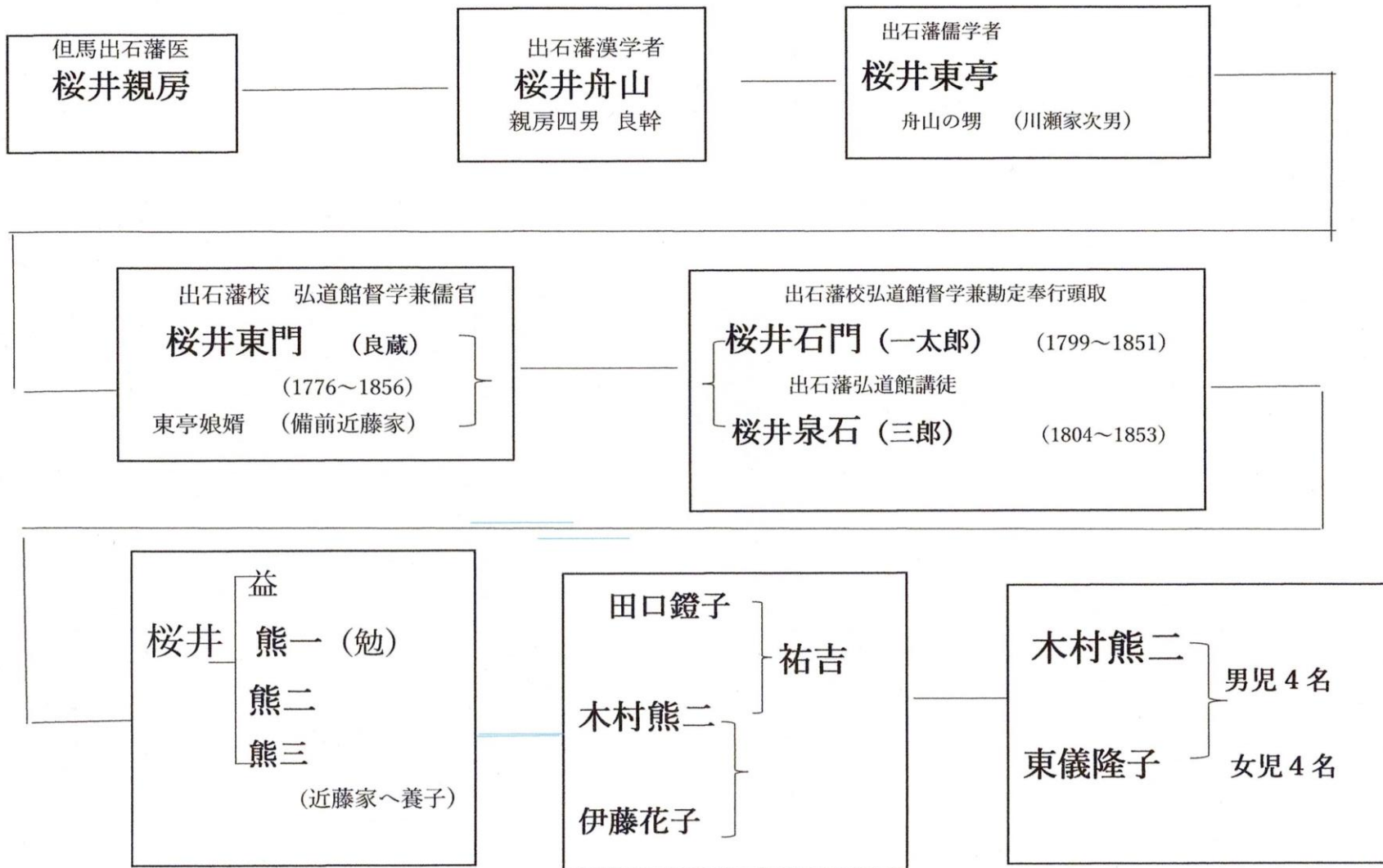
信州上田海野丁
上村半兵衛方 木村熊二
七月十四日投函

木村熊二鑑子
往復書簡

明治16年7月

【仙石氏系図】





無



出生の謎 仙石家お家騒動

仙石越前守秀久

(1551～1614)

仙石久利

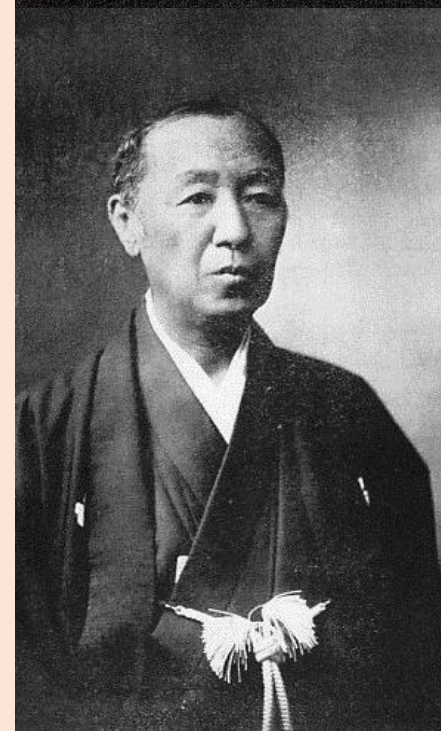
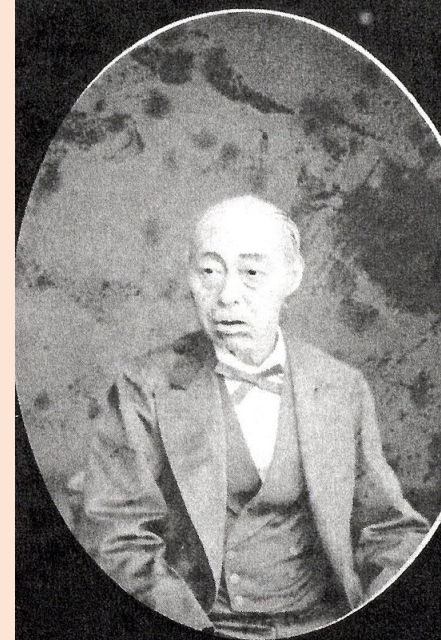
(1820～1897)

仙石兵部大輔忠政

(1578～1628)

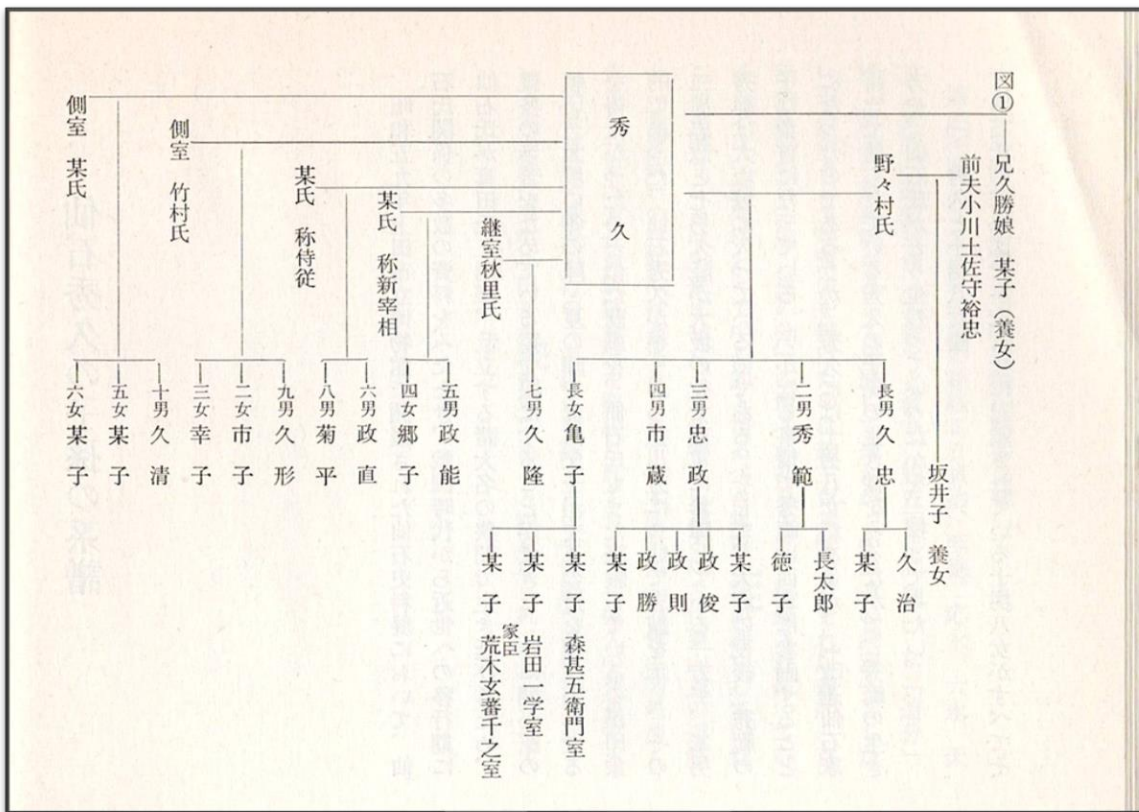
仙石政圀

(1844～1917)



仙石秀久資料

東信史学会 『千曲』 52号1987
 「仙石秀久の子孫の系譜」 矢島千代子



一筆申入候、仍而貴殿妹并宗也娘之儀、
 貴所御妹ハ其方家中へ御仕合尤ニ候、
 宗也娘之儀ハ京ニても田舎ニ而も不致
 公界、町人江被仕付可然候、恐々謹言

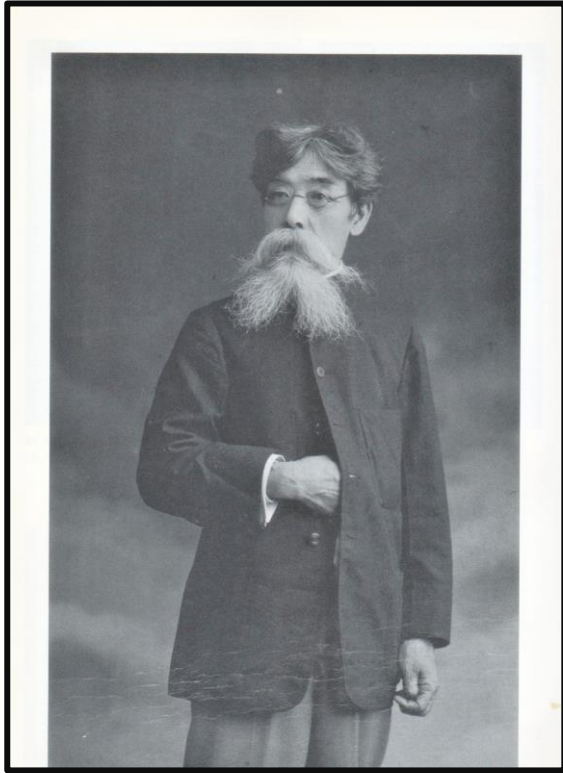
十月十四日 利勝花押

土井大炊助

本田上野介

正純花押

仙石兵部少輔殿



家族

熊二

妻 鏡子

長男 祐吉

小諸時代

明治19年8月18日

明治3年撮影

家族

撮影明治20年

左から

木村花子 (伊藤花子)

木村祐吉 (長男)

田口町子 (先妻鏡子 母)

田口つる子 (義弟卯吉 妻)

田口文太 (卯吉長男)





家族

木村（東儀）隆子と晩年の熊二

〈撮影年次不明〉

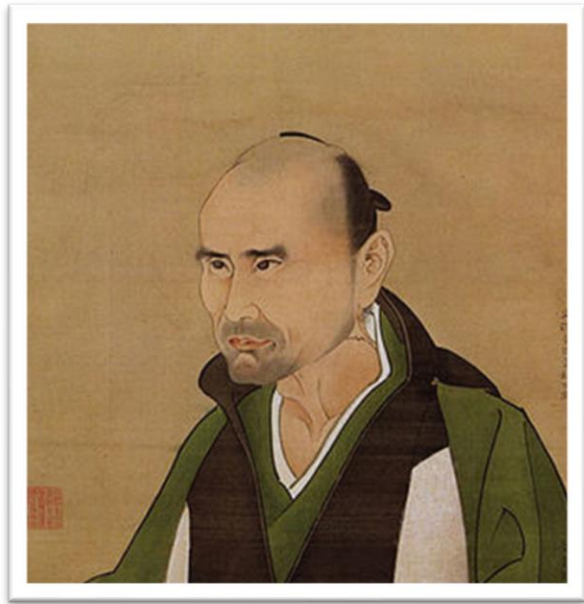


熊二の理解者

桜井勉 (実兄)

巖本善治 (但馬出石後輩)

田口卯吉(義弟・鏡子異父弟)



佐藤一斎

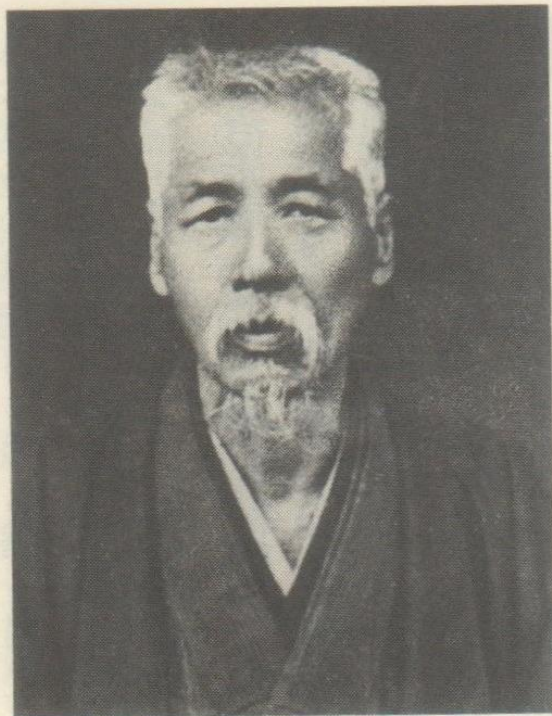


中村正直 (敬字)



田辺太一 (蓮舟)

昌平覺時代の指導者



幕臣時代の師

乙事太郎乙
山岡鉄舟
勝海舟

渡米・留学時代

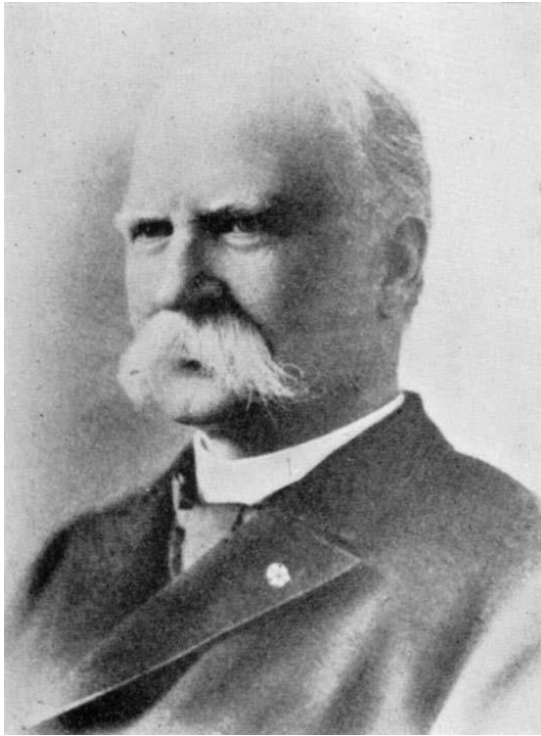
外山正一

大儀見元一郎

森有礼

目加田種太郎





12年の米国留学
1870～1882

D・モーレイ教授
ホープカレッジ

G・Hフルベッキ



アメリカ合衆国
ミシガン州
ハーランド





アメリカ合衆国

ニュージャージー州
ニューブランズウィック

ラトガース大・神学校

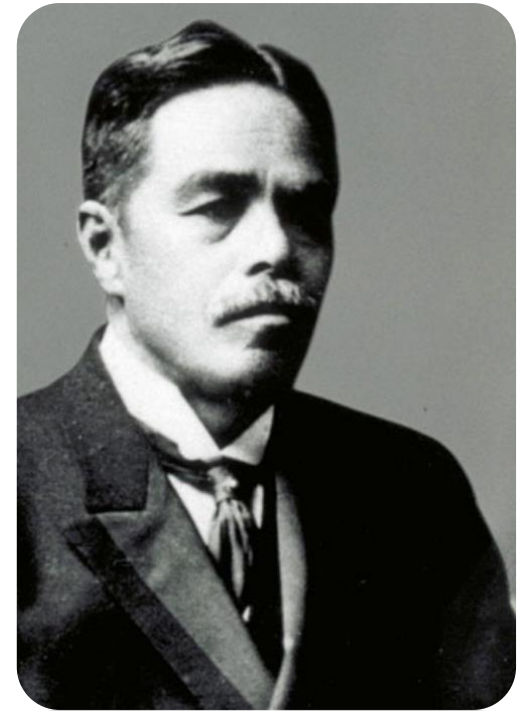


津田仙

新島襄

内村鑑三

熊二と親交の深かった基督教指導者



第3回
全国基督教信徒
大親睦会

明治16年(1883)
(於)東京新栄橋教会

撮影
東京九段下鈴木写真館

2列目右から3人目
木村熊二
新島襄
内村鑑三



上州高崎から
信州小諸
上田 長野への
伝導活動

上田教会(現存) は国内で7番目
明治9年設立の教会

上田藩士族で最初の基督教信徒

松平忠考

上田で基督教を広めた

稲垣信

上田で最初の女性信徒

バイブルウーマン

小島弘子



懐古園内の記念碑(懐古園神社)

書 勝海舟
撰文 中村敬宇

西島敏之

西島(佐野)富寿

はじめて小諸を訪れる

明治16年7月10日
(140年前)



明治女学校創立 明治18年(1885)

日本人による女子教育の充実を目指す

洋式婦人束髪法
附東髪式
圖



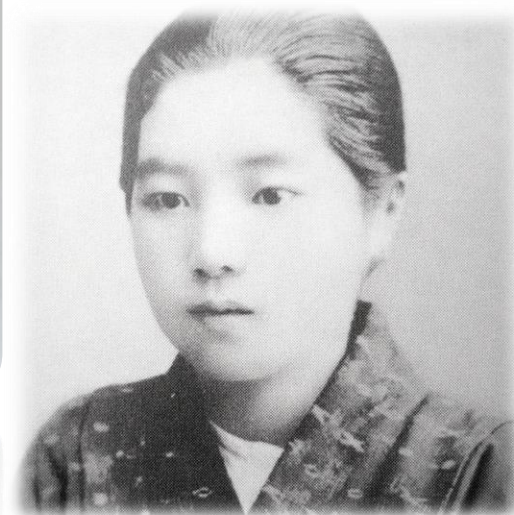
村野徳三郎著『洋式婦人束髪法』
(「婦人束髪会規則」を掲載)



津田梅子



岩松賤子



明治女学校卒業生

羽仁もと子 野上弥生子 相馬黒光(星良)

妻鏡子の死と葬儀の様子を伝える明治19年9月4日の『毎日新聞』の記事

「木村鏡子の葬儀 基督教会の女傑」

同子の葬儀は一昨日下谷教会の会堂に於いて西教式を以て執行し谷中の墓地に埋葬したり。当日午後三時より儀を行いひが、其次第を略記せん、主会は大儀見元一郎氏にて、三浦宗三郎祈祷を為し奥野昌綱聖書を誦じ、巖本善治し鏡子の履歴を演じ海老名弾正氏其志業を賛し、併せて西教の有力なることを述べられ、小崎弘道氏の祈祷を以て儀を終われり、

この間和英両語の弔歌を洋琴(オルガン)に和して歌誦したり、この儀中尤衆人の感情を動せしは巖本氏が履歴の演説にして同氏は木村氏に深交ありて、鏡子より殆ど生子の如き愛遇を受けたるを以て、其志行を知ること他人の比にあらず、生木村氏に交際ある人にして、鏡子が非凡の婦人たるを知る者と雖、此履歴をきき其志気の高邁行状の卓絶にして生死間豪も心を動かさず人を愛するの念始終一の如くなりしに驚感せり。

埋葬の間石原量氏の祈祷あり、当日来会せし人甚衆く、会堂に溢れて居座なければ、堂外に立ちて此儀に参する人甚多かりき、此皆鏡子生前の愛友なり、嗚呼木村氏の如きは現時俗界に勢位ある人にあらずして会葬者の盛なる其生前の美行人感倅するによる者し、同子の履歴は大に世上婦人の志行を励ますにべきを以て逐次之を本紙に掲載すべし。

年譜 1

| 和歴 | 西暦 | 木村熊二年表 | 〈関連事項〉 | 田口鏡子・桜井家関係年表 |
|------|------|--|----------|-----------------------------|
| 弘化2年 | 1845 | 但馬出石藩（兵庫県豊岡市）京都御池藩邸で出生 儒学者桜井一太郎（石門）の次男、生後に出石へ | | |
| 嘉永1年 | 1848 | | | 鏡子出生、父耕三（井上氏）母まち、曾祖父佐藤一斎の命名 |
| 嘉永3年 | 1850 | 実父一太郎（石門）52才没 | | |
| 嘉永4年 | 1851 | | | 父田口（井上）耕三22才没 |
| 嘉永5年 | 1852 | 叔父桜井三郎（石泉）を頼り江戸出府 | | |
| 嘉永6年 | 1853 | 叔父桜井三郎（石泉）46才没 | ペリーー浦賀来航 | |
| 安政1年 | 1854 | 木村近之助（琶山）の養子となり湯島聖堂に通学 | 〈日米和親条約〉 | |
| 安政2年 | 1855 | 昌平校にて安積良斎 中村敬宇 佐藤一斎から学ぶ | | 田口卯吉生まれる 父田口（西山）樫四郎、母田口まち |
| 安政3年 | 1856 | 養父木村近之助（琶山）28才没 | | |
| 安政4年 | 1857 | 河田興（廸斎）塾生となり 田辺連舟から英語を学ぶ | | |
| 安政5年 | 1858 | 昌平覺入学 聖堂寄宿人となる | 〈日米修好条約〉 | |
| 安政6年 | 1859 | 河田興（廸斎）没 | | 父田口樫郎35才没 曾祖父藤一斎87才没 |
| 文久2年 | 1862 | 幕臣に取り立てられる。母栢没 | | |
| 元治1年 | 1864 | 武田耕雲斎の乱、長州征伐に出陣 勝海舟配下となる | 〈禁門の変〉 | |
| 慶応1年 | 1865 | 田口鏡子と結婚後も探索方として活動 | | 木村熊二と結婚 |
| 慶応2年 | 1866 | 百表 五人扶持徒歩目付とし京阪を往復 | | |
| 慶応3年 | 1867 | 江戸帰還 下谷生駒前に居す、隣家に乙骨太郎乙 | 〈大政奉還〉 | |

年譜 2

| 和暦 | 西暦 | 木村熊二年表 | 関連事項 | 木村鏡子・田口家・桜井家関係年表 |
|-------|------|--|----------|---------------------------------|
| 明治1年 | 1868 | 長男祐吉生まれる。彰義隊参戦後、横浜から静岡へ | 〈戊辰戦争〉 | 鏡子。祐吉、祖母かつ母まち、異父弟卯吉と横浜へ転居 |
| 明治2年 | 1869 | 乙骨太郎乙、田口卯吉と共に沼津兵学校へ | 〈版籍奉還〉 | 鏡子。田口一家と共に静岡へ |
| 明治3年 | 1870 | 森有礼少弁務使一行に加わり渡米する | | 卯吉、沼津兵学校資業生。桜井勉（長兄）出石藩大参事。 |
| 明治4年 | 1871 | ミシガン州ハーランドホープカレッジ校長ヘルプス家に 寄宿しグラマースクールへ入学、静岡県より学費支給 | 〈廃藩置県〉 | 桜井勉 松山県権参事 |
| 明治5年 | 1872 | ハーランドホープ教会で洗礼を受ける | 〈太陽暦採用〉 | 桜井勉 大蔵省出仕 |
| 明治6年 | 1873 | 文部省よりの帰朝命令拒否、以後私費留学生となる | 〈地租改正〉 | 桜井勉 租税寮地理課長 |
| 明治7年 | 1874 | ホープカレッジ予科終了 | 〈佐賀の乱〉 | 田口卯吉、大蔵省出仕 鏡子一家を東京水道端に呼ぶ |
| 明治8年 | 1875 | ホープカレッジグラマースクール入学 | | 鏡子、牛込北山伏町へ転居 田口卯吉山岡千代と結婚 |
| 明治9年 | 1876 | ホープカレッジ本科入学 | | |
| 明治10年 | 1877 | | 〈西南戦争〉 | 河田鎮62才没 |
| 明治11年 | 1878 | | | 桜井勉 地理局長 |
| 明治12年 | 1879 | ホープカレッジ卒業 ラトガース大・ニューブランズウィック神学校入学 | | 田口卯吉『東京経済雑誌』発行 |
| 明治13年 | 1880 | ニューヨーク大学医科の奨学金生となる | | 祐吉共立学校入学 |
| 明治14年 | 1881 | マスターオブアーツ学位取得 | | 田口卯吉東京府議会議員当選 桜井勉内務大書記官 |
| 明治15年 | 1882 | オランダ改革派ミッション派遣宣教師として帰国、 下谷初音町に家塾を開く | [日本銀行設立] | 田口卯吉『日本開化小史』刊行 鏡子祐吉フルベッキより受洗 |
| 明治16年 | 1883 | 下谷教会牧師就任、第3回全国基督教信徒総会の演説に参加 群馬高崎を拠点に長野・上田・小諸への伝道活動に赴く | | 祐吉同志社英学校入学 |
| 明治17年 | 1884 | 旧約聖書翻訳事業 基督教青年会YMCA活動に参加 | [秩父事件] | 駒込西片町に新居移転 |
| 明治18年 | 1885 | 下谷教会辞任 明治女学校設立校長に就任、取締役木村鏡子 | | |
| 明治19年 | 1886 | 鏡子コレラに罹患し急死、 学校経営を岩本善治に託す | | 木村鏡子死去 享年38歳 |
| 明治20年 | 1887 | 学習院・共立学校（後の開成中学）成立学舎で教鞭を執る | | 福井藩儒臣伊藤輔次女、花19歳と再婚 |

年譜 3

| 和暦 | 西暦 | 木村熊二年表 | 社会 | 関連事項 |
|-------|------|---------------------------------|-------------|-------------------------|
| 明治21年 | 1888 | 頌栄女学高校長、台町（高輪教会）牧師就任、芝白金に転居 | | 明治学院生徒、島崎春樹・関友三に洗礼を受ける |
| 明治22年 | 1889 | 日本基督一致教会と日本組合基督教会の合同問題 | 〈大日本帝国憲法発布〉 | |
| 明治23年 | 1890 | 旧約聖書翻訳事業・YMCA活動から手を引き、頌栄女学校校長就任 | | |
| 明治24年 | 1891 | 群馬から信州への伝導活動、小諸を訪れる | 〈内村鑑三不敬事〉 | 荒町関友三家の歓待に感謝、佐久移住の契機となる |
| 明治25年 | 1892 | 台町教会を辞職、佐久移住を決意 | | 早川権弥との知己を得て、佐久市前山に居を構える |
| 明治26年 | 1893 | 小諸義塾開設（12月1日） | 〈信越線全通〉 | 北佐久郡小諸町999番地寄留 |
| 明治27年 | 1894 | 瓦門校舎へ移転 | 〈日清戦争〉 | |
| 明治28年 | 1895 | 花と離婚 | | |
| 明治29年 | 1896 | 義塾校舎新築 東儀隆子（23歳）と再婚 | | 福沢諭吉來諸 |
| 明治30年 | 1897 | 塩川伊一郎に桃の栽培を指導 | | |
| 明治31年 | 1897 | 中棚鉦泉開発 | | 島崎藤村 『若菜集』刊 |
| 明治32年 | 1899 | 島崎藤村赴任 長男祐吉死去 | 各学校令公布 | 私立学校・中学、実業学校・高等女学校 |
| 明治33年 | 1900 | 水明楼建築 | | 内村鑑三『聖書の研究』刊 |
| 明治34年 | 1901 | 女子学習舎開校 | 理想団結成 | |
| 明治35年 | 1902 | 教頭井出静死去 | | |
| 明治36年 | 1903 | 小諸義塾創立10周年（有終館構想） | 国定教科書使用開始 | |
| 明治37年 | 1904 | | 〈日露戦争〉 | |
| 明治38年 | 1905 | 女子学習舎閉塾 島崎藤村辞任 | | 田口卯吉死去 関友三死去 |
| 明治39年 | 1906 | 小諸義塾閉校 長野市日本基督教会長野講義所へ赴任 | | 島崎藤村『破戒』刊行 |
| 明治40年 | 1907 | 横浜フェリス英和学校赴任（1年間） | 小学校義務教育6年制 | |
| 明治41年 | 1908 | 連合共進会で天幕伝導・クルセード開催 | | 小諸幼稚園開園 |
| 明治42年 | 1909 | 長野を中心に伝導活動を行う | | |
| 明治43年 | 1910 | | | |
| 明治45年 | 1911 | | | |

年譜 4

| 和暦 | 西暦 | 木村熊二年表 | 社会 | 関連事項 |
|-------|------|-----------------------------------|---------|---------------------|
| 大正1年 | 1912 | | | |
| 大正2年 | 1913 | | シーメンス事件 | 宗教局内務省から文部省に移管する |
| 大正3年 | 1914 | 小諸図書館開設 | | |
| 大正4年 | 1915 | 伝導局長野市から撤退により小諸に戻る | | |
| 大正5年 | 1916 | 女子学習舎同窓会 上田を拠点に単独で伝導活動を行う | 第1次世界大戦 | |
| 大正6年 | 1917 | 牛込教会牧師就任 芝白金三光町276に転居 | | |
| 大正7年 | 1918 | 浅間会発足 帰園と称して毎年夏季は水明楼を訪れる | | 浅間会（義塾卒業生により熊二への支援） |
| 大正8年 | 1919 | 伝導局から年金支給（小野山嘉七郎の尽力による） | | |
| 大正9年 | 1920 | | | この年も神津猛より育英金を贈られる |
| 大正10年 | 1921 | 喜寿の祝い浅間会の主催で行う（島崎・三宅参加） | | |
| 大正11年 | 1922 | 夏軽井沢、星野にて内村鑑三と歓談 | | |
| 大正12年 | 1923 | 9月1日震災当日小諸滞在中で難を逃れる | 関東大震災 | |
| 大正15年 | 1926 | 9月の小諸訪問が最後となる | | |
| 昭和2年 | 1927 | 2月28日 自宅にて永眠 享年82歳 | | |
| | | 3月5日牛込教会にて葬送 谷中霊園に埋葬 | | 7月24日「千曲川旅情の歌」歌碑除幕 |
| 昭和11年 | 1936 | 義塾卒業生により懐古園内に肖像レリーフパネルを設置 | | |
| 昭和36年 | 1961 | 水明楼、木村家遺族から小諸市に寄贈される | | |
| 昭和53年 | 1978 | 3月「木村熊二没後50年展」荻窪清水画廊で開催 | | |
| | | 9月木村熊二没後50年記念事業「小諸の春」発表会（於）小諸市民会館 | | |
| 平成5年 | 1993 | 第1回「蓮峰忌」小諸義塾の会により開催 | | |
| 平成6年 | 1994 | 市立小諸義塾記念館開館 | | |
| 令和6年 | 2024 | 「市立小諸義塾記念館」開館30年 | | |
| 令和7年 | 2025 | 「木村熊二生誕」 180年 | | |
| 令和9年 | 2027 | 「木村熊二歿後」 100年 | | |